

---

# あなたにあいたい

嘉月天空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたにあいたい

### 【Zコード】

N6223A

### 【作者名】

嘉月天空

### 【あらすじ】

一話一話がそんなに長くない、いわば短編集です。話自体に関連性もないで、これからお読みになつても構いません。全8話で完結済みです。テーマは各話の頭文字を繋げた言葉。ので、恋愛モノ多めです。読んでいただければ幸いです。

三ヶ月前に付き合い始めた彼と別れたのは、久しぶりに晴れた六月のある日。

メールと電話は頻繁にしてたけど、お互い何かと忙しく、なかなか会えなかつた。何とか予定を合わせて、久しぶりにデートの約束を取り付けた日曜日。

先週買ったばかりのワンピースに、彼に褒めてもうつたお気に入りのミコール。誕生日に、と買ってくれた鞄を持って、あたしは待ち合わせ場所に行つた。

あたしは、彼もデートを楽しみにしてると思つてた。

けど待ち合わせに現れた彼は、見たことのない女の子を連れていた。

「悪いけど、そーゆー口だから」

それってどーゆー口??

意味わかんない。

彼の連れていた女の子がくすつと笑つた。

あたしはその場に取り残された。

\*

しばらく 実際には何時間かみたいだつたけど ほんやりと立つていたあたしは、やつと自分が携帯を手に持つてゐるのを思い出した。

ずっと握り締めていた固まっていた右手をほぐし、最もかけなれた、親友の番号に電話をかける。

相手はなかなか出なかつた。延々と呼び出し音が鳴つて、留守番電話サービスに繋がつた。普段なら腹立たしいその声も、あたしはぼーっと聞き流し、声が聞こえなくなつたのに気付いて、ようやく録音が始まつていると思い至つた。

何が言いたいのかよく分からなかつたけど、何か言わなくてはならないような気がして、とりあえず言った。

「……サチ？ えつと。コイだけど……何かあたしコージに振られたみたい」

他に言ひ事がなくなつたので、それだけ、と呟いて電話を切つた。

切つてから、ばかばかしい事をした、と後悔した。だからといって、今更取消もできない。

こんなものサチに言つたつて他の友達に言つたつて仕方ない。彼女たちに何かして欲しいわけじゃないし、言つたからどうなる訳でもない。

もつとずつと、自分は冷静で落ち着いた人間だと思つていたけど、実は動搖しているのかもしねれない。  
でも涙は出ないな、と思つた。

そこから動く氣にもなれなかつたので、そのまま立つていたら聞き慣れた着信音が聴こえてきた。コージとお揃いにしてた着信音。手元を見ると、液晶に“ヤマザキサチカ 山崎紗智花”という文字とサチの顔写真が表示されている。ほとんど無意識の動作で電話を取つて、耳に押し当てる。

『コイ？ 大丈夫？ 平氣？ 今どこ？』

もしもし、という間もなく、サチが立て続けに言った。

「うん。平氣だよ。何で？」

『何でつて……ねえ、今どこにいるの？』

『どこだっけ。えっと。

「新宿」

『……の、どこー！？』

「交差点？」

田に入つたので言ってみる。

『ちょっとユイ、本当に大丈夫？』

「ダイジョーブだよ。変な電話してごめんね』

『そんなの良いから、アンタいつ家帰る？ 今日バイト終わったら行くからさ』

「じゃあもう家に帰るよ」

今朝は慌てていたから、部屋は荒れ放題のはずだ。あいにく一人暮らしなので、勝手に片付けてくれる人もいない。サチが来る前に簡単に掃除をしようと思った。

『わかった。あとちょっとでバイト終わるから、すぐ行くね。待つてんのよ？ そうだ。夕飯作つたげるよ。美味しい奴。期待してね！』

急に明るくサチが言うから、どうしたんだろうと思つたけど、あたしはありがとう、と言つて電話を切る。

それからもう一回まわりを見回した。

知らない内に日が暮れかけていく。待ち合わせは午前十時だったから、ずいぶん長くいた計算になる。あんまりそんな気はしない。

帰らなあや。

ずっと立っていてこわばつた足は、なかなか思つみつに動かなくて、あたしはよたよたと歩き出した。

切符を買って山手線に乗る。夕方だからか、人が多かつた。戸口の前に立つて、扉によりかかつた。よりかかつた扉が開く時だけ、そこから離れた。戸が閉まるとき、またよりかかる。

そんな事を繰り返していたら、また誰かから電話がかかってきた。誰だらう、と思って覗き込んだ液晶にはまたサチの名前。

「もしもし」

『ちょっとゴイ！　あんたびにまつつき歩いてるのー？　何で新宿にいるあんたが私より帰るの遅いのー』

え？　と窓の外を見ると、いつの間にやら用事が空に昇つてゐる。携帯の時計を確認する。大分時間が経っていた。

扉の上のモニターを仰ぎ見て、あたしは言ひ。

「今、渋谷だからもうちょっととかかるかも」

『はあ！？　何で渋谷なんかにいるの？』

『…………寝過ごしちゃったのよ』

座席に腰かけてフネをこぐ中年の男を見て、とつとこしゃうしゃう言い訳する。

『じゃあ、前のフアマヒにいるから帰つて来たら声かけてね』

「うそ、『めん』

言ひだけ言ひて電話を切る。

席はこくつか空いていたけれど、座る気にはならなかつた。

\*

家に帰ると、食材も買ってきてくれていたサチが夕食を作ってくれた。

“美味しい夕飯”といつ言葉に偽りはなく、あたしは食べ過ぎるくらい食べた。サチは片づけまでしてくれて、その後両親の待つ自宅に帰った。

それから一週間、あたしは今までと何の変化もない生活を送った。少なくとも自分ではそう思っていた。

強いて言ひながら、コーデジとのメールと電話のやり取りの時間がなくなつて、部屋でぼんやりする時間ができた。

その日も、あたしがぼんやりしていたらサチから電話があつたのだ。

『もしもし、ユイ。元気ー?』

「あ、サチ。どーしたの? 鼻声だよ?」

『実は風邪引いちやつてさー。せっかくの天氣の良い日曜なのに暇でしようがないのよ。相手してよー!』

無理に情けない聲音を作るサチにあたしは声をたてて笑つてしまふ。

『ひどーい! さつき天氣予報見たら、もう今日でこの所の良い天氣は終わりなんだって。梅雨前線が近付いてるとかで今日の午後からまたしばらく雨が続くらしいよ。嫌よね~』

そういえば、この一週間雨はふらなかつたな、とあたしは窓の外を見た。

サチの言つ通り、そろそろ雨の降り出しそうな雲模様だ。

『せっかくいい天気だから買い物でも行こうかと思えばさ～』

「そーねー。雨って嫌いじゃないけどうつとうしいのよね」

相槌を打つていると、携帯電話の向こうから、「紗智花！ 寝て

なさいって言つたでしょ！！」と怒鳴り声が聞こえた。

『はいはいはい！ わかりました～！ もー。ごめんコイ。切るね

「ううん。気にしないで。お大事にね』

『うん。ありがとう。……今切つてるでしょ～？ 見てわかんない  
！？』

サチの怒鳴り声を最後に電話が途切れた。

あの元気があれば大丈夫そうだ、と微笑む。

再び窓を見ると、先刻より薄暗くなっているような気がする。

突然、窓辺のチェストの上に置いた写真立てが伏せられてい  
る事に気がついた。毎朝カーテンの開け閉めにチェストの前に立つ  
ていたが、気付かなかつた。

いつから倒れてたんだろう。

思つて、写真立てを手に取つた。

写つっていたのは「コーディ」とあたし。

それを見て、あたしは写真立てを伏せたのが誰か解つた。一週間  
前夕飯を作りに来てくれた時に、サチが気を利かせてわざと伏せた  
のだろう。

写真の中のコーディとあたしは笑つていた。

写真を撮つた一週間後には別れているなんて思つてもいなかつた表情。

「の時から既にコージには別の女がいたのだろうか。

「の時からコージはあたしと別れることを考えていたんだろうか。コージの笑顔を見つめて、あたしは答えの出ない疑問を浮かべる。

あたしまだコージが好きなんだ。

何で今まで気付かなかつたのか、あたしは唐突に理解した。

まだ、好きなんだ。

あたしは彼からサヨナラもキライも聞いてない。言われたも同然だけど、それでも聞いていない事には違ひない。

かすかな音を立てて、雨粒が窓ガラスにぶつかつた。

そのまま雨は勢いを増し、一週間の鬱屈を晴らすように降り注ぐ。

窓は閉まっている筈なのに、あたしの頬にも熱い雨粒が流れた。

## 夏（前書き）

やや女性の性愛的描写があつますので、チョットでもそんなのあつたら嫌！ といつ方は「注意下さい。」

ただし、逆に期待するほどのナニもありませんので、そういう意味での期待もしないで下をこ。

## 夏

その日は、朝から頭痛がした。

\*

いつも通り高校に向かう為に家を出たが、途中で気分が悪くなつて路上に座り込んだ。

夏の熱気がじわじわと伝わってくる。

しばらくそうしていたが、道行く人にじろじろ見られるのが嫌で、近くの公園まで行つた。

朝の公園は人がいない。ぼんやりとベンチに座るのは嫌いじゃない。木陰に入つてベンチに私は深く腰掛ける。

上を見ると、青ざめた空に白い月が見えた。太陽は眩しすぎてそちらを見ることが出来ない。日差しあきついといつよりは鋭く、刺し貫くような激しさを持っていた。

近年稀に見る猛暑　　だつけ。

今朝の天気予報を思い出して口の中だけ呟いた。

上を向くのが辛くなつてきたのでうつむいた。体勢的にはこの方が楽だ。

背中まで長くたらした髪が顔の横にさりさりと落ちてきた。カーテンが閉められたように視界が狭められる。

私はただひたすら、口腔に溜まる唾を何度も飲み下していた。気持ちの悪さだと嚥下しているようで、更に気分が悪くなる。しかし、止める事もできずに、その動作を繰り返す。

ただそれだけのことなどをどのくらい長くやっていたのか、苦しい中でぼんやりと「もつ今日は遅刻だらうな」と思った。

「大丈夫？」

不意に誰かの声がした。

のろのろと顔を上げると、同じ学校の制服が見えた。スラリとし  
た足と、スカートの裾。顔は見えない。そこまで視線をあげるのが  
辛かった。

「……大丈夫です」

喉が引きつって、かすれた声が出た。

「気分が悪いの？ 日差しにあてられた？ 暑いからね」  
ハスキーな低音。科白とは裏腹に、口調は涼やかだ。

すっと、視界にあつた膝が折れ曲がり、目の前に顔が現れた。

まつ毛きに目に入ったのは日だった。

長いまつげに縁取られた目が、上目遣いにこちらを見上げてくる。  
整つた顔立ちの中に、媚びた様子も、なよやかな風もしない力強い  
瞳。それに寄り添つかのように引き締まつた唇は赤い。

「化粧……してるんですか？」

思わず間の抜けた事を訊ねてしまった。

私の そしておそらく彼女も 通う高校は、規則にうるさい

進学校なのだ。進学校故か、校風が、堂々と校則を破るよつた生徒はなかなかない。

彼女は軽く目を見開き、にやり、と笑った。  
その動作の為に、短く切つた彼女の髪が揺れる。

「可愛いね」  
わけがわからない。

彼女は立ち上ると、私の隣に腰掛けた。

気分は、まだよくならない。嘔吐感にも似た吐息を飲み込み、私は散々悩んで隣の彼女を無視することにした。  
そんな事より気分が悪い。

ふ、と息をついた瞬間、肩をつかまれ強く引き寄せられる。  
言葉を上げる暇もなく、私は彼女の太ももに頭を乗せる格好になつていた。

「……なに……」

とつさに伸ばした腕も絡めとられる。振りほどけつつにも力が出ない。

「じつとしてなよ。気持ち悪いんでしょ」

名前も知らない彼女は私の顔を覗き込んだ。

「止めてください」

「いいじゃん」

私の言葉には取り合わず、そつと手のひらを私の額に当ってきた。  
ひやりとした感触が伝わってくる。正直気持ちよかつた。

「田、閉じてたら？」

そういう彼女を無視して、逆に私はまじまじと彼女を見つめた。

小作りな顔。肉のそげた尖った顎と、それを縁取るように落ちている短い黒髪。日に晒すのがもったいないような白い肌。通った鼻筋を中心に、印象的な瞳と唇。

じついう人を美人といつのだらう、と思つた。

大きな黒い瞳が面白そうにこちらを見下ろしている。

「アタシの顔何かついてる？」

冷たい手の感触に、少し気分のよくなつた私は苦笑しつつ言つた。  
「……田と鼻と口」

「つははは！ アンタやっぱ面白いね。気に入っちゃつた」  
そこまで笑われると思つていなかつた私は、涙を流して笑う彼女にぎょっとする。

「気分ちょっとは良くなつたみたいじゃん」

「……ええ、まあ……おかげさまで」

「なにそのとつてつけたような返事」

唇を尖らせてそう言いながらも、額におかれた彼女の手は優しい。

「良いんですか？ 学校」

訊ねた私に、彼女はあっけらかんと言ひ。

「いいんじゃない？」

「よく……ないですよ」

出欠は内定に響く。彼女の学年はわからないけれど、下手をしたら将来にかかる。

「ん、てかサボろうとしてここ来たんだしね」

その言葉を、私はすんなりと納得してしまった。自分の高校に堂々とサボる人間がいるとは初耳だったが、そうでもしなければこんな通学路に関係のない公園でへたりこんでいる自分に会えるはずもない。

「少し寝たら？」

「でも……」

そこまで迷惑はかけられない、と続けかかった唇を押さえ、額に置かれていた手を目の上まで移動させる。

「大丈夫、」

私はなぜだか自然に目を閉じてしまった。

\*

ふっと目を開けると、間近に大きな瞳があった。

眠るつもりはなかつたのに、いつの間にか眠つていたらしい。彼女は私が目を覚まして、こちらをじっと覗き込む。

「……あの、」

顔を背けることもできなくて、思わず言つと、彼女は微笑みながら顔を引いた。

「いやーホント可愛い顔してるな、と思つて」

自分より綺麗な顔をした人に言われたくはない。

「可愛いないです」

言いながら身を起こして、彼女の隣に座りなおした。気分は大分よくなつていた。

「十分に可愛いよ。昼のお用さま  
「は？」

思わず聞き返す。意味が解らない。

彼女は人差し指で高く空を指した。  
「今にも消えそう」

私はわけもわからずムツとする。確かに身体が丈夫な方とはいえないが、そう簡単に消え去る程か弱いつもりもない。

「ならあなたは夏ですね」

彼女はちょっとと目を見開いた。

「夏？ 季節の？」

ただ何となく言つただけの私は彼女の素直な反応に驚く。

「そう。夏みたいにハツキリした自己主張の激しい人 私とは正反対ですね」

慌てて無理矢理そうこじつけると、彼女は爆笑した。

「それ良い！ 今度使わせて！－！」

「一体何にだらうか。

眉根を寄せる私に、彼女はまた笑つた。

「（）褒美に教えてあげよう。アタシの名前、夏<sup>ナツ</sup>って言つの」

「夏……」

何とはなしに繰り返す。

「そ。時代劇みたいでしょ？」

皮肉気に笑つて立ち上がる。

「大分気分良くなつたみたいじゃない。良かった」  
私は慌てて礼を述べた。

「ありがとうございました」

ペコりと頭を下げる。

「良いつてば」

「でも、お礼を何か……」

彼女はとりあわずに歩き出す。

が、数歩歩いてから、もう一度戻つてくれる。

「やっぱお礼だけもらつとくわ」

「じゃあ、連絡先を教えてください」

私はメモを取ろうと携帯を開きながら言つた。電話帳の新規登録画面にたどり着くより早く、彼女が言つし当てた。

「秘密。」

言つが早いか彼女の顔が近づき、すばやく私の唇に自分の唇を押しつけた。

「 ッ

咄嗟の事に反応できずにいると、彼女は近づいてきたのと同じすばやさで離れ、こっやかに手を振つて公園を出て行つた。

情けないこと、私が動けるようになつたのは彼女の背中も見えなくなつてからだった。  
どうじつもありだらうか。

“やつぱお礼だけもうつとくわ”

彼女の科白を思い出す。

よもやさつきのキスはお礼の代わりだったのだろうか。

私は首を左右に振る。

いやいや、男のヒトならともかく 男性が同じ事をしたら容赦なくひっぱたいただろうが 。

いつの間にやら、一握り残っていた気分の悪さを吹き飛んでいた。

彼女の去った方を見る。

突拍子もない変な人だったが、もう一度、彼女と話がしてみたいと思つた。

## 竹

竹のお花が咲くのはとっても珍しいの。  
そう教えてくれたのはアキちゃんだった。

じゃあ竹のお花が咲いたら一緒に見に行こうよ。  
そう言つたのはわたし。

\*

竹は今年、黄緑の花をつけた。

わたしは都内の大好きな公園の、大きな大きな噴水の縁に座つて、  
アキちゃんを待つていた。

一番最初、アキちゃんに会つた場所がこの噴水。

それ以来、アキちゃんと待ち合わせるといつもここ。

わたしの目の前を小さな男の子と女の子の集団が走つて行つた。  
一緒に遊びたかったけど、わたしはじつと我慢をする。

だつてわたしはアキちゃんを待つてゐるのだ。勝手に遊びに行つたら、アキちゃんは怒つてしまふかもしれない。  
わたしはアキちゃんが大好きだつたから、嫌われたくなかつた。

さつきの男の子と女の子の集団が戻つてくる。いっしに向かつて走つてくるので、わたしは遊ぶのに誘われるのだと思つた。

誘われたらどうしよう。

「めんなさい。アキちゃんを待つてるから、一緒に遊べないの。  
うん、そう言おう。

心の中でそう決める。

男の子と女の子の集団はあつという間にわたしの田の前にあつてきた。わたしは足が遅いので、早いなあと感心した。集団の中で一番偉そうにしている男の子が一歩前に出た。みんなのリーダーだらう。

「やーい、ババア！」

わたしあびつくりしてしまった。  
あんまりびつくりして声も出ない。  
彼らは、ひたすらはやし立てる。

遠くから、女の人気が走ってきた。

「口下！ タケルやめなさい！！」

リーダーの男の子のママのようだった。怒鳴りつけられた男の子と、その他の子どもたちが、わーっと声をあげながら好き勝手な方向へ走って行ってしまった。

男の子のママがわたしの前に立ち、申し訳なさそうに頭を下げる。  
「本当にめんなさい、ウチの子が……」

「大丈夫です」

わたしは答えた。うん。大丈夫。ババアなんて言われると思つてなかつたからびつくりしただけだ。

男の子のママがいなくなると、わたしは足をぶらぶらさせた。  
アキちゃんはなかなか来ない。

探しに行つたほうがいいかもしない。

今朝もテレビで誘拐事件についてやっていた。小さい子どもが狙われるらしい。アキちゃんも、途中でそんな誘拐犯につかまつてしまつたのかもしれない。

わたしは心臓がじわじわするのを感じた。

もしやつだつたらどうしよう。アキちゃんは助けを求めているかもしない。でも、もしもそうじやなかつたり? わたしがアキちゃんを探しに行つた後、アキちゃんがここに來たら?

わたしは困つてしまつた。  
どうしよう。

そうだ。アキちゃんのねつひに行こう。行つてアキちゃんを迎えて来たよ、と言おう。アキちゃんは、もしかしたら約束をすっかり忘れてまだおつかれいのかもしれないし。

わたしは噴水の縁から立ち上がり、アキちゃんのおつかへと歩き出した。

\*

わたしはアキちゃんの家に行くまでの間に、アキちゃんとすれ違つたら大変だ、と辺りを見回しながら歩いた。

周りを見て歩いたから、普段から遅いわたしの足が、もつと遅くなる。

でもわたしは一生懸命歩いた。

もつくりだつたので、アキちゃんのおつかへの道のりが遠く感じる。

こっぽこ歩いた気がして、足がくたくたになつた。

アキちゃんのおつかせ、広いお庭のついた大きなおつかだ。マンション暮らしのわたしのうちとは違う。

アキちゃんのおうちは、長い長い塀が続いていて、わたしはいつもそんなおうちに住んでみたいと思つていた。

だけど、今日はその長い塀が白と黒の幕で覆われてこる。だれかのいたずらかしら、とわたしは思つた。

入り口まで行くと、白にテントがあつた。幼稚園の運動会の時、ホーソーセキのあるようなテントだつた。

黒い服の大人の人があたくさんいた。

わたしは何があつたのか、アキちゃんに聞こいつと思つて、一生懸命アキちゃんを探した。

アキちゃんが約束にこれなかつたのに、関係がある気がしたのだ。

そのつか、たくさんの大人の人に囲まれた、黒い服のアキちゃんを見つける。

わたしはアキちゃんに近寄つた。

「アキちゃん、どうしたの？」

アキちゃんはびっくりしてわたしの顔を見る。

「ねえ、今日公園に来られなかつたのはこのせい？」  
アキちゃんのママもびっくりしたようにわたしを見た。  
どうしてだかわからない。

いつも元気なアキちゃんも、ぽかんと口を開けながら立つていて  
だけで、わたしの質問に答えてくれなかつた。

突然、わたしは肩を強く引かれて、強引に後ろを向かされた。髪  
をまとめて黒のスーツを着た女人人が立つていて。

「おばあちゃん！ しつかりして下さー！ その子はアキノさんじ  
やなくて孫のユウカちゃんよ」  
「ユウカちゃん？ アキちゃんにこんなにそっくりなのに、アキち  
ゃんじやないのかしら？ ジャあアキちゃんはどう？

田の前の女人にそう聞こいつかと思つたけど、女人があんまり  
怖い顔をしていたから、わたしは怖くなつて、女人の手を振り払  
つた。

「急に病院を抜け出したつて聞いて心配したんですよ！？ 私です、  
マキコです。シンイチさんの妻の。わからないんですか？ おばあ  
ちゃん！」

やはり黒い服を着た小さな女人が、わたしの服の袖を引いた。

「おばーちゃん。どうしたの？」

「おばあちゃん、貴女の孫のサツキよ？ わかるでしょ？ おば  
あちゃん、しつかりなさい！」

何を言つてゐるのかわからない。

アキちゃんはどこだろ？

おひの中かもしけない。

わたしは、再びわたしの肩を掴んだ女の人の手を振り払つて、アキちゃんのおひの中へ入つた。

おうちの中は薄暗くて、お仏壇のにおいがした。

広いお座敷の奥にお花がたくさん飾られ、お線香がたくさん供えられていた。真ん中に、誰かの写真が飾つてある。着物を着たおばあさんの写真だった。

アキちゃんはいない。

どこに行つてしまつたんだろう。

他の場所を探ねうとすると、さつきの黒いスースの女の人があわしの手を掴んだ。

「おばあちゃんいい加減にしてください！ みんな心配してるのです。病院に帰りますよ！」

いやいやをするのに手を離してくれない。

「アキノさんには私が代わりにお線香をあげましたから、ね？」

嘘つか。お線香があがつてるのはアキちゃんじゃない。  
嘘つか。アキちゃんは約束を守ってくれない。

アキちゃん、どこへ行つたの？

## 匂い（前書き）

「匂い」はHセルFです。  
HセルFがお嫌いな方は「」注意下さい。

## 匂い

認識番号：T - 13G5H753B14 - 8697956322

547

個体名：シズカ 静

マスター：Law

タイプ：汎用ヒューマノイド

私がマスターに与えられた個体情報はそれだけ。

私は22万2516・4時間前 約25年前 、人間で言うところの家政夫としてマスターに製作された。

マスターはヒューマンインターフェイスの権威で、しかし人間嫌いが高じて、隠遁生活をおくっていた。

私を造った理由も、人と接したくないからだった。

私を造ったその時でさえ、既にマスターは高齢だった。それから25年近くも経つたのだ。人間の平均寿命を考えると、長生き過ぎるくらいだったろう。

マスターは頻繁に「人間嫌いの私が長生きをすることは、人生とは何と皮肉な事だ」と言っていた。

そのマスターの一切の生命活動が、昨夜停止した。

\*

哀しいという感情はインプットされていなかつたので 人間は人が死ぬとその様な感情を持つのだといふ 、私はデータベースから「葬儀」という項目を引き出し、その準備を始めた。

データベースには、最近の流行は宇宙葬だと書かれていたが、マスターがそれを望むとは思えなかつた。マスターの思考パターンから鑑みると、火葬ないし土葬で、地に埋められる事を望むだらう。

生憎、マスターの遺体を火葬するだけの火力と空間を持った装置がなかつたため、私はマスターを土葬にする事に決めた。

マスターに防腐処理を施し、氷室 研究所の一施設であるに安置し、私は棺を買い求めに街へ降りた。

幸い、マスターの研究費用兼生活費として国家から支給される金にはまだ余りがあつたので、金銭的な問題はなかつた。棺を買い、郵送を頼むと、私は帰宅の途についた。

途中花屋を見かけ、葬儀に花を飾る習慣もあるといつ事を思い出す。

マスターが花を好むとは思えなかつたが 現にマスターの屋敷内で花を見た事はない そのような習慣があるならば、と花屋に立ち寄つた。

\*

「はい、いらっしゃい

茶色の髪の推定25歳前後の女性が、勢いよく言つ。

言つてから、青い瞳で私をまじまじと見つめた。

「……ヒュー・マノイド?」

本人は小さな声で言つたつもりだろうが、人間とは聽力の異なる私にははつきりと聞こえた。

確かに、私は一般的なヒューマノイドに比べて、ヒューマノイド  
めいた部分がない。マスターに言わせれば、人間臭く造った、との  
事だ。

しかし、人間には「ぐく珍しい青銀の髪と紫の瞳は私を人でないも  
のだ」と言つてゐるようなものだった。

「花を下さい」

私は少しボリュームを上げて言つた。

私には理解できないが、時折女性が私を見て、頭に血を上らせる  
事がある。マスターは怒つてゐるのとは違うのだ、と言つていたが、  
私には未だにその差がわからない。

「…………あ、ハイ。何のお花を？」

しばし硬直していた女性は、更に顔を赤くしながら私に尋ねた。  
私はその様子を見て、少し声のボリュームが大きかつたかも知れな  
い、と考えた。

しかし、それ以前に何の花を購入するか考へていなかつた私は、  
沈黙した。

「…………考へていませんでした」

正直に告白する。

「えつと……じゃあ、どなたに贈る花なのかしら？ それとも「白  
分用に？」

「マスターにです」

「失礼ですけど、貴方のマスターは「病氣か何か？」 それともお祝  
い事かしら？」

私は瞬間的に考える。病氣では、ない。祝い事でも、ない。

「どちらも違います」

「貴方のマスターは男性？ 女性？」

「男性です」

「そうね……あ、年齢はおいくつくらいの方？」

「102歳と8ヶ月と12日でした」

「まあ、『高齢なのね』

言いながら女性は首を傾げた。

じゃあ何で？

疑問が顔に表れているような顔だった。

しかし、私はその疑問に答える義務がないので 訊かれなかつ

たからだ 沈黙を守る。

「何かお好きな花はあります？」

質問の主語が曖昧だったが、マスターにも私にも好きな花はない  
ので「ありません」と答える。

「そうね、じゃあこれはどうかしら」

そう言つて女性が手に取つたのは大輪の百合だった。

「いい匂いでしょ？ 今ちょうど時期なのよ」

食物にこだわりのなかつたマスターは、私に味覚と嗅覚を与えた  
かつた。その為、匂いはわからなかつたが、傷もなく大きく咲いた  
花は、美しいと言われる条件を満たしているのは理解した。

「それを下さい」

「何本お求めですか？」

私は先刻買った棺を思い出す。マスターは高齢であることもあり、  
一番小さな棺でも余つてしまふくらいだつた。棺とマスターの体積

を比較し、花屋に置かれた百合を見る。

「そこにある百合をすべて下さー」

そのくらいないと、棺に入れ、周囲に飾る分に足りないだらう、  
といつ判断だつた。

「…………は、はい！ 毎度ありがとうございます」

私は料金を支払い、それも配達を頼んだ。

\*

最後に役所にマスターの死亡を届け出た。死亡届は受理されなかつた。ヒューマノイドが届出をするには、一人以上の医師の診断書が必要なのだという。知らない内に法改正が行われていたようだ。すぐさまデータベースを確認すると、1週間前に緊急で改正が行われ、区切りのいい今日から施行となつたようだ。法律の項目は1ヶ月に一度、まとめて変更がなかつたかどうかのチェックをする為、気付かなかつたらしい。

「申し訳ありませんね、改正前はヒューマノイドの申告でも構わなかつたんですが、ヒューマノイドを使った悪質な保険金詐欺もありますし、最近はその…………物騒な事件が起こり易いのですから」「人間臭い”私に罪悪感を覚えたのか、受付の男性はもじもじとそう言つた。

物騒な事件とは、約3ヶ月に起きたヒューマノイドの事故だらう。ヒューマノイドが自らのマスターを死に至らしめたしたのだ。その事件をきっかけに、最近ヒューマノイドの誤作動が数件確認された事がわかつた。

原因是設定ミス。一時的にマスターの登録が解けてしまったのだ。マスターの家にいない状態で、認証された人間でもない人間がマスター宅にいる。この状態をヒューマノイドは異常と見て、警報を鳴らし、対象の人間のいる部屋の鍵をロックした。たまたまその瞬間、そのヒューマノイドのマスターは左右から閉まる扉の中央に立っていた。扉はロックされ、身動きの取れない状態になつたマスターは、高齢で、心臓に持病を持つていた。

不幸な偶然が重なつたとも言える事件である。発作を起したそのマスターは亡くなつた。おそらくマスターが亡くなつて直に、ヒューマノイドはマスターを再認識し、生命活動の停止を確認。マスターを扉から解放し、ベッドに運んだ。警報に駆けつけた警官は、亡くなつたマスターと死亡届をプリントアウトしているヒューマノイドに出くわした。彼らはマスターの身体についていた痕を不審に思い、防犯カメラを検め、今回の事件が発覚したというわけである。

私は役所を出ると、最寄の病院に連絡を取り、マスターの家まで来てもらう事にした。

\*

私が家に帰ると、タイミングよく花屋の車が来た所だつた。帰宅は予定より遅れていたが、幸い棺の届いた様子もなかつた。

私は花屋から花を受け取り、氷室に運んだ。マスターの周りを百合でうずめる。

ややあつて、棺が届いた。それも氷室に運び込み、マスターを中心に入れた。空いたスペースを花で埋める。

それから大分経つて、人間の医師がふたりと医療用ヒューマノイドがやってきた。23年前に登場した医療用ヒューマノイドのお陰

で、医師の仕事はないも同然という公然の秘密通り、医療用ヒューマノイドはマスターを老衰による死亡と断定。医師たちは医療用ヒューマノイドがプリントアウトした死亡診断書にサインをして帰つていった。

「綺麗には綺麗だがこれは……また凄い香りですね」

と、医師のひとりが帰り際、そここここを埋め尽くす百合に小さく漏らした。

\*

私には匂いの概念がない。

匂いとはいがなるものなのだろうか。

こればかりは説明できないとマスターは言った。

理解は出来なかつたが、私は氷室に充満しているらしく百合の“香り”を感じ取ろうとした。形として鼻はあるが、嗅覚を要しない私には無意味なものだ。実質的な機能はない。口も同様で喋る以上の機能はなかつた。

それでも人間が呼吸をするのを見よう見まねでやつてみると、特に何も起きない。

私はマスターを見た。

何故マスターは私に嗅覚を備え付けてくれなかつたのだろうか。  
答えはわからない。

また、マスターが起き上がつて私にその機能をつけてくれる可能

性がない事もわかつっていた。

翌日、死亡届を受理されたマスターを埋葬した。

私はマスターの墓に花を飾る。何故そうしているのかはわからない。行動原理の不明な行動は慎め、とマスターに言っていたが、行動原理はあるような気もしていた。自分の考えがよく分からぬ。故障の前兆かもしね。

そして同じく故障めいた思考で私は思つ。マスターが生き返る確率は本当にゼロか、と。

私には年下の、可愛い恋人がいる。

\*

私はよーちゃんと呼んでいる。よーちゃんは私をナツキ、と呼び捨てにしていた。それが歳も身長も私に勝てないよーちゃんなりの、精一杯の背伸びらしい。大人ぶりたい年頃なのだろう。無理に私の煙草を吸おうとしてはむせ返るよーちゃんを 実はまだギリギリ未成年だが、他人の事をどうひと言えないので注意しないでいる、私は心底可愛いと思つ。

よーちゃんは専門学校生。私は商社マンだ。

出会つたて間もない頃はまだ、私はよーちゃんを名字で桜井さん、<sup>サクライ</sup>と呼んでいたし、よーちゃんも私を名字で立木さん、<sup>タチキ</sup>と呼んでいた。

それがいつからよーちゃん、とナツキになつたかは記憶していないが、私がよーちゃんをよーちゃん、と呼ぶようになつたきっかけは、私の悪友、芹澤隆文セリザワタカフミだった。

そもそも彼が、年甲斐もなくよーちゃん、などと呼び始めたのだ。私もその内つられてよーちゃん、と呼ぶようになつてしまつた。よーちゃんも「今までそんな風に呼ばれた事がない」と嫌がつていたが、その内慣れてしまつたようだつた。

私とよーちゃんを引き合わせたのも、同じく隆文だった。よーちゃんは隆文の親戚の友人の親戚の子どもだとで、隆文自身とは一切関係がなかつたが、ちょうどよーちゃんの通う専門学校の近くに

居を構えていた隆文が、上京してきたてのよーちゃんの面倒を任せられたのだそうだ。

隆文は隆文なりによーちゃんを心配してたらしく、何くれとなく世話を焼いていた。それにしたって、教えてもないのに「お前よーちゃんど「テキたな！？」等と心臓に悪い質問をされた時には心底寿命が縮まると思った。まったく良く見ているものだ。

その内、私とよーちゃんの間で、同棲する事が決まり、やはりひとつ屋根の下で男女が暮らそうと「そんなのだからケジメはつかねばなるまい、とよーちゃんの両親に連絡を取る事になつた時には、更に寿命が縮まるかと思つた。

今だから笑い話で済むが、当時は真剣によーちゃんの両親に殴られるのを覚悟していた。健氣にもよーちゃんが「そんな事はさせないから」と言い切つた時には不覚にも涙ぐみそうになつたものだ。そんな健気なよーちゃんに、夜な夜な、仮想よーちゃん父に「ウチの子をたぶらかしあつて！」「と怒鳴られる夢を見ているなどとは言えず、胃に穴が開く日も近いかと悩んでいた。

私の顔色がそんなに悪かつたのか、よーちゃんは電話での連絡にしよう、と言つてくれた。

が、すべての予想に反してサバけた性格らしいよーちゃんの両親からの反応は「「ご迷惑おかけしますねえ、ウチの子を宜しく頼みますよ」という私へのメッセージと、「つまくやんなさいよー」というよーちゃんへの激励の科白 受話器から音が漏れて聴こえたのだだけだった。あまりのあつけなさに、夢ではないかと頬をつねつたくらいだ。

まがりなりにも、未成年の両親がこんなことでいいのだろうか。

\*

「ナツキー、朝飯できたぞ……。」

煙草をくわえて回想してみると、口からよーちゃんの顔がのぞいた。

専門学校で男くさい連中に囲まれていてからか、はたまたイキがつているのか。近頃よーちゃんは口が悪い。上京したての可愛らしくて初々しいよーちゃんはどうへ行ってしまったのか。私は本当に悲しい。

「ナツキ……聞いてるか？ オイ」

「よーちゃん、その話し方やめよつよ。可愛いない……」

私が嘆くと、よーちゃんは顔を真っ赤にしてつけていたエプロンをむしりとった。

「か……可愛いなくて良いッ！！！ それより飯だ！！」

よーちゃんはいつも赤くなつてそういうけれど、もうほん私から見たら可愛い方が良いに決まっている もう十分可愛いけど。

顔を膨らませてよーちゃんが行つてしまつと、私は苦笑しながら立ち上がり、煙草を灰皿に押し付けた。

リビングに行つて、後ろから抱きしめる。耳元にキスすると、あつさりとよーちゃんの機嫌は直つてしまつた。……そういう所も可愛い、と言つ度に隆文に「彼女のいない奴の前でノロケるな！」と怒鳴られる。

ふたりでご飯を食べ終わると、よーちゃんは慌てて準備をし、専門学校に行つてしまつ。隆文の家よりも専門学校から遠い私の家か

らだと、食事を食べたらすぐ出かけないと一限に間に合わないのだ。引っ越そつか、と言つた私を押しとどめたのはよーちゃんである。

よーちゃんが出かけてしまつて、私は大急ぎで食器を片付け始めた。普段の一倍くらいの早さだ。天気予報を見る間も惜しみ、私は家を飛び出し、朝早くから開いている100円均一へ飛び込んだ。

明日はよーちゃんの誕生日なのだ。

三回三回。

よーちゃんは嫌がるけど、ひなまつりが誕生日なんて可愛いと思つ。

私は、クラシカーを初めとするパーティグッズを買いあさつた。明日、ふたりでパーティをやるつもりなのだ。もちろんよーちゃんには秘密にしてある。じついう事は驚かせたほうが楽しい。

それに、よーちゃんは徹底したワリカン主義者だ。“ナツキに養われているつもりはない”を信条に、食事もデートもみんなワリカン。一応そこそこ収入のある社会人としては實に悲しいが、よーちゃんはとかく私の財布に頼るのが嫌いだつた。同棲する時には、家賃も半分払うと言つて聞かなかつたのだが、バイトをたくさんして無茶をして専門学校生の本分を忘れたり、病氣や怪我をしてしまう方が嫌だ、と何とか説得したのだ。それでもよーちゃんは後払いを考えているらしく、ひつぞり貯金をしているのを知つていた。

もちろん一日デートして、夜景の見えるレストランでのディナーも捨てがたいが、そんな些細なことでよーちゃんと喧嘩をするのも、よーちゃんのプライドを傷つけるのも、よーちゃんの稼いだお金を無駄に浪費させるのもまっぴらだつた。場所や金額が問題ではない

のだから、別に祝う場所は自宅だって構わない。

一通り必要と思われるものを買うと、私は最後に切り絵でバースディケーキが描かれたグリーティングカードを買い物カゴに入れた。全てを買い終わると、急いで最寄り駅に向かい、荷物をコインロッカーに放り込む。家に戻っている時間は流石になかった。

\*

お昼休み、私はよーちゃんバースディ計画を煮詰めていた。

今日帰る前にプレゼントを選び、パーティグッズと共にそっと家に運び込む。私より帰宅時間の早いよーちゃんには、先にお風呂に入るよう携帯に電話でもしておく事にする。夜中に料理のある程度の下地を作つておき、隠しておく。

翌朝、よーちゃんを送り出したら、即座に飾り付けをし、家をでる。帰宅途中ケーキと追加の料理を買って帰り、パーティをする。

完璧だ。

そう思つてから、ひとつ忘れていた事を思い出す。

朝買つたバースディカードに名前を書き忘れていた。明日の朝はバタバタして、書く時間はないだろうし、このカードは、帰宅したよーちゃん宛にパーティの招待状の形式を取るつもりでいた。

隆文あたりは臭い、と一蹴するかもしれないが、私はこういった演出が大好きなのだ。

カードを前に万年筆を取り出すと、私はカードの白い部分にメッセージを書き込んだ。

明日が楽しみで仕方ない。早く明日にならないだろうか。  
早くよーちゃんの驚く顔が見たい。

わくわくと私はカードを折りたたむ。  
カードの表に、宛先と差出人の名前欄があった。

早く、明日になつて欲しい。

私はわくわくした気持ちのままそこに筆を走らせる。

『 桜井 陽平さま  
愛を込めて 立木 夏紀 』

## 家

結婚生活14年と10ヶ月。水晶婚式を目前にして、妻はいなくなつた。

残されたのは10歳の娘と6歳になつたばかりの息子。そして不甲斐ない私。

\*

見合いではなく、恋愛結婚だつた。エレベーターガールだつた彼女。そのデパートのおもちゃ売り場で働いていた私。

休憩の時、時々話すようになり、帰りに一緒に帰ることも多くなつた。彼女のアパートは、私の家の通り道にあり、よく一緒に帰つたものだ。

彼女の25歳の誕生日。私は彼女に結婚を申し込んだ。彼女は泣きながら頷いてくれた。しばらく子どもはできなかつたけれど、私は幸せだつた。

初めての子どもは、彼女が欲しいと言つていた女の子。名前は、彼女の名前の「深鈴」<sup>ミズズ</sup>から一字取つて、「鈴花」<sup>スズカ</sup>にした。ふたり目は男の子。彼女は「貴方の名前から取りましょう」と言つて、「朔」<sup>ハジメ</sup>から取り、「朔哉」<sup>サクヤ</sup>と言つ名前にした。

私たちとは 少なくとも私は幸福だと感じていた。

\*

その妻が、失踪した。

ある朝起きると、書置きを残し、妻はいなくなっていた。

妻は天涯孤獨の人で、頼るべき両親はいない。私は妻の交友関係も把握しておらず、ただおろおろとするばかりだった。見かねたのか、私の母が子どもを引き取る、と申し出てくれた。まだ家や車のローンを抱えたままの私には、ありがたい申し出だった。

妻は消えた。

妻の残した書置きを、私は見る事ができなかつた。どんな離別の言葉が書き添えられているのかと思つと、いたたまれなかつた。

妻は不幸せだと思っていたのだらうか。  
そうだつたに違ひない。

家で、ただ子どもの世話と家事に追われる毎日。日々それを繰り返し、それ以外の事もできずに。たまの贅沢はと言えば子どもの誕生日などの祝い事だけ。服や鞄を貰つてくれる事もない夫。

そんな生活につんざつしたのだらう。

そんな生活が嫌だつたのだろう。

仕事に追われ、家のことは後回しにしてきた。

それを妻は理解してくれていると思いこんでいた。

後で。

また今度。

そう思い、考え、飲み込み、すり潰してきた、妻への言葉や気持ちは、摩耗してしまった。

かつては確かにこの胸の中には、たそのカケラも、今は小ぢやなくて見つけることができない。

それに妻は気づいたのだろうか。

それに、妻は嫌気がさしたのだろうか。

書き置きをあければ解るかもしない答えを、私は引き伸ばした。考えないよう、考えないよう心がけ、がむしゃらに働いた。

妻が私の元を去ってから、三ヶ月が経った。

母は、仕事に打ち込む私の様子を快く思っていないようで、何かについては電話をしてよこした。その日も、母は鈴花と朔哉を連れて、家に来た。

鈴花は、曇気ながら、母のいない理由と、自分たちが祖母の元へと送られた理由を察しているようだった。

朔哉は幼すぎてよく理解できないのだろう。久しぶりに帰った自分の家に、喜んで飛び回り、私に尋ねた。

「パパ。ママは？」

「ママは、遠いところに出て行かれてるんだ」

苦しそれに私はそう言つた。

「どこにいるの？」

「遠いところだよ」

居場所なんて知らない。じつちが教えてほしくらいだ。

朔哉は不満そうだった。

「そうだ、朔哉。お墨をみを見ようか」

私は、そう口走った。

そういうえば、この所、趣味の天体観測もしていなかつた。

\*

いつの間にか埃をかぶつっていた天体望遠鏡を引っ張り出し、庭先に設置する。仰いだ空に、一番見つけやすいオリオン座を見つけて、そんな事すらすっかり忘れていたのを思い出した。

朔哉は天体観測で機嫌を直したらしく、望遠鏡を覗き込んでは大騒ぎをしていた。

私も、妻がいたころそうしていたように、星座や星団の場所、形、謂れなど知ることをゆっくりと話す。

もう何度も話していると思うのに、子どもたちは飽きない。鈴花も朔哉も、瞳を輝かせて聞き入っていた。

そういえば、と思う。

私はこんな瞳の子どもたちや、妻を愛していた。  
妻がこんな瞳をしなくなつたのはいつからだつたろつか。

\*

その晩、子どもたちを寝かしつけ、母と別れて寝室に入ると、私は妻の残した書置きの封筒を切つた。

逆さにすると、真っ先に銀の指輪が転がり落ちてくる。  
結婚指輪だった。

中には折りたまれた離婚届。妻の名前と、印鑑が押されている。

手紙の類はなかつた。

妻の怨嗟の声すら想像していた私は、逆に拍子抜けしてがくりと肩を落とす。

妻は、この家にも私にも、何ひとつ感情も残していかなかつた。この家に彼女が置いていったのは、しがらみの全てだ。

結婚指輪。

結婚という事実。

夫。

子供。

妻はその全てを捨てて行つた。  
理由すらも告げず。

彼女は「家」という閉じた箱の中で過ごしたくなかったのか。  
それで、箱の中に全てを捨てていったのか。

「家」に彼女を捕らえていた私を。  
「家」に捕らわれている私を。

何故、一言も相談してくれなかつたのか。

何故、一言すら置いて行つてくれなかつたのか。

もう遅いのだろうか。

彼女はいなくなつてしまつた。

未練がましく、言葉を交わしたいと思つてゐる自分は愚かなのだ  
らうか。

妻がいなくなつてから初めて、私は声を殺して泣いた。

## 煙草

「ふあひや！……つとお！」

謎の声を上げて、アタシはバスの揺れに盛大によろける。

とにかく両手を上げようとするが、既に荷物でいっぱいの両手は上がらない。反射的にふんばろうとした右足が、床を離れる。荷物と自分自身の重みに耐え切れずに、そのまま後ろへ倒れ掛かる。「走馬灯すら浮かばないの！？」と考える間もあればこそ。左足までが床を滑る。瞬間的に体が宙を浮き、アタシは強く眼を瞑った。

相馬亞美  
ソウマアミ

職業：フリーター。享年二十一歳。

初対面で一度も正確に名前を呼ばれた事のないまま死す。  
ああ、何て可哀想なアタシ。

しかし、待てど暮らせど後頭部を背もたれの角にぶつける事も、  
背中から床にたたきつけられる事もない。

おやあ？ と眼を開けると、見知らぬ男の顔が目前にあった。

「大丈夫ですか？」

腰にくるバリトン。彫りの深い顔立ち。びしりと着込んだ高そうなスーツ。手触りの良いコート、首から垂れる白いマフラー。ふわりと香る苦い香りは多分煙草。何でこんなしみつたれたバスに乗つてるんだか全然理解できない、死又程格好良い男の人だった。半ブリッジ状態の上ガニ股氣味のポーズのまま、アタシは思つた。

……さつき、もっと可憐な悲鳴を上げておけば良かつた。

「だ、大丈夫です！」

ホラー映画もびっくりの速さで海老反りから立ち直り、男の人に向き直る。

「ありがとうございました！」

行儀良く頭を下げようとしたが、重い荷物と、バスの揺れに負けず踏ん張る足のせいで、今にも「押忍！」とか叫びそうなポーズだ。

格好悪い。

恥ずかしくて顔が上げられなかつた。

「大丈夫？ 荷物重そうだけど……」

「いえ！ 全然大丈夫です！ アタシこう見えて力持ちで……！！  
あああああ。何を話してる自分！ 落ち着け！ 可愛く可憐な  
様子で迫るんだ！！ 力技で行け！！

もはや考えている事が支離滅裂な事すら、この時のアタシにはわ  
からなかつた。端的に言つて、頭に血が上つていたのだ。

「でも、危ないから、僕が少し持つよ」  
彼はにっこり笑つて言った。

「…………」「僕」！ 「僕」！！ 二十歳過ぎた（多分）男が「僕」！  
！！

ツボだつた。

マズイ。ヤバイ。どーしよう。助けて。

見ず知らずの男（格好良い）に荷物を持つてもらい、微笑を顔面  
に張り付かせながらアタシは思つた。

惚れるかも。

後から考えれば、厳密には”惚れた”だ。

確かに惚れっぽい自覚はあつたが、よもやバイトに向かつ先のバスの中で運命の相手に出会いおひとはー。

「ありがとうござります」

もう一度お礼を述べて、頭を下げる。相手の手が目に入った。

左手の薬指に銀の指輪。

「……あ

「？　どうかしたの？」

流石にいきなり「結婚してるんですか？」とは聞けずにアタシは慌ててごまかす。

「え、えっと……煙草お吸いになるんですか？」

「いめん……臭いかな？　自分では解らなくて……妻にもいつも注意されるんだけど」

質問の形は違つても、結果は同じ。予期せぬ形で回答をもらひつ。

「いいえ、煙草を吸う方好きですよ」

微笑む。無理矢理、微笑む。実は煙草なんてケムイだけで大ッ嫌いだったけど、彼の吸う煙草なら許せると思つた。

ふしう、ヒマヌケな音を立ててバスの扉が開く。見れば降りるバス停だつた。

彼から荷物を受け取つて、もう一度お礼を言つ。ここで手を振る彼に、荷物のせいで振り返す手もなく、アタシはバスが見えなくなるまで見送つた。

\*

それからトボトボとバイト先の保育園へと向かう。アタシのバイト先は伯母の経営する保育園。仕事はただの雑用。今日は少し早めのクリスマスの準備のために、こんな大荷物だつたのだ。

保育園につくと、アタシは伯母を探して園長室に向かつた。クリスマスの準備品諸々を、倉庫に入れる許可をもらわなくてはいけないからだ。

園長室の扉をノックして開けると、もあ、と煙が漂つてきた。

「……っ」

ケムい。というか眼に染みる。

「伯母さん換気してよ換気！！」「うめいて窓を大きく開け放つ。

コレだから愛煙家は嫌いだ。

紫煙を全て部屋から追い出す。伯母は席を外していくようすで、ちよつじ居なかつた。

保育園という特殊な職場の関係上、煙草を吸える場所は限られる。そのひとつが園長室だつた。だから仕方がないとはいえ、ここはいつも煙たい。

「もへへ！ どこ行つちゃつたのかしら」

言いつつもその匂いをどこかで嗅いだ気がして、アタシはこめかみをぐりぐり押した。何かを思い出す時、そうすると思い出しやすいような気がするのだ。

伯母の机に放置された煙草の箱。パッケージにはマルボロ、と書かれている。煙草嫌いのアタシでも知っている名前。

不意に、アタシはこの匂いをどこで嗅いだか思い出す。

気付いたら煙草の箱を手に取っていた。

あの男<sup>ひと</sup>の匂いだ。

微かにコートから漂つた苦い香り。

頬が紅潮するのを感じる。同時に、あんなに嫌いだった匂いなのに現金だなあ、と思つ。

にまにまと波打つ口元を押さえられないと、突然、予告なく扉が開いた。びくつと震えてとつそに煙草の箱を机の上に放り出した。

入ってきたのは伯母さんだった。

「あにやつてんの?」

胡乱気に聞く伯母に、アタシは首をぶんぶん振る。

「なんでもない!」

「んーまあなんでも良いけど。てか窓開けないでよオ寒い」「それは伯母さんが煙草吸いすぎるからでしょ?」

言いながら、アタシは仕方なく窓を閉める。

何故か伯母さんがひょい、と片眉を上げた。

「ところで、伯母さんの煙草……マルボロだけ」

「そーゆ」

言ひつ伯母さんの眉毛が再び跳ね上がる。

「……何?」

伯母さんの奇妙な表情にアタシは尋ねた。

「んー。亜美があたしの煙草の銘柄知つてたり、興味持つたり、換氣終わつてないのに窓閉めるの珍しいと思つて」

「そおー?」

アタシは慌てて室内を見回す。全く気付かなかつたが、確かにまだ少し煙たい。

「何だ。煙草に興味がでたか?」

「そんなんじやないつてば!」

アタシは即座に否定するが 速度が速すぎたらしい。伯母さんがにまにまと笑つた。

「彼氏が愛煙家だつたとか?」

「違つつてばー!..」

「そーかそーか。亜美の彼氏がねえ。興味あるなら持つてつていよい。あと数本だし」

アタシの力いっぱいの否定を歯牙にもかけず、伯母さんは、アタシに煙草の箱を放つて遣す。とつてに受け取ると、伯母さんに返すのが惜しく思つた。

アタシは、伯母さんにクリスマスの準備品についての許可を取り、文字通り逃げ出すように園長室を後にしたのだった……。

\*

家に帰つて、自室に入つたアタシは窓のそばにへたり込んだ。何だかどつと疲れが出た気がする。

そつとコートに手を入れれば、伯母さんに押し付けられた煙草の箱。中には、伯母さんの言つたとおり、まだ一、三本の煙草が入つ

ていた。

じーつと見つめ、彼を思い出す。名前も住んでいる所もわからない、しかも既婚者の彼。煙草はマルボロの彼。

アタシはライターを探して部屋を探るが、もちろん持っているはずもない。仏壇からマッチをくすね、煙草に火をつけた。それだけできつく煙の匂いがする。

アタシは煙草の端を口にくわえて、ちょっとだけ吸い込んだ。

「……つぶ！ げふつ……げほえほげほつ……ぐげふつげほへほげほつ！」

盛大にむせる。

涙が出て、景色がにじんだ。

「不味いよコレ」

咳いて、立ち上る煙の香りだけを吸い込む。

また、同じ時間のバスに乗つてみよつと思つた。

今度は大荷物じゃない時に。

## 良い天氣

「はいッ！」

そう鋭く声をあげた高瀬美紗タカセミサがトスするのを、俺は漫然と眺めていた。

体操服から伸びる手足は長い。身長も、クラスの女子の中で一番高かつた。

「おい、登川トガワ！」

声に振り返ると、同時に真横を同じクラスの橋本翔ハシモトカケルが抜き去った

後。

「この馬鹿！」

その後ろを先刻の声の主 村上聰史ムラカミサトシがののしり声と共にどたどた走つていった。

そーいやバスケの試合中だつたか。

我に返つたのと橋本が3Pを決めるのが一緒。

「あははは！ 何やつてんの祐樹ユウキ」

美紗が隣のバレーコートからわざわざ声を上げた。

「うるせー」

怒鳴り返して、村上のバスを受け取る。すぐさま妨害に入る橋本を抜いて 足は遅いが、ドリブルの腕前は部内一だと自負している 先行していた一年生にバスを出す。一年生がシューートを決めた。

同時に甲高い笛が鳴る。

「ハイそこまでー」

キモトアカネ

顧問の理科教師、木本茜キモトアカネが声を上げた。何故顧問が理科教師かというと、ふたりいる体育教師は野球部と水泳部の顧問になっているからだ。

「ンじゃー、今日は職員会議あるからボール片してお終い。女子もその試合が最後ねー」

女子バレー部の顧問も兼任している 練習が同じ体育館だかららしい 木本が、振り返って美紗たちに言つ。

俺たちの中学校に女子バスケ部と男子バレー部はない。弱小部なので部員が集まらず、ツブれてしまつたのだ。逆に俺の所属する男子バスケ部と、俺の幼馴染、美紗が部長を務める女子バレー部は、毎年県大会まで進む、この辺りではなかなか名の知れた部なのだ。

その内バレー部の試合も終わつた。

「ツギー……ツしたア！」

全員で木本に一礼して、部活は終わりだ。

\*

「あ、祐樹帰りちょっと付き合つて」

部活が終わつて、校門をぐぐりかけた時、美紗が駆け寄ってきて言つた。

「何だ何だ。デートか？」

耳ざとく聞きつけた村上がどこからともなく寄つてくる。

「そんなんじゃねエよ、キャプテン」「  
といふか耳ざとすぎだぞ、村上。

「うん。明日は希ちゃんの誕生日なのよね」

希は俺の双子の妹だ。ちなみに女子校に通っているので、学校は違う。美紗は毎年、律儀に希にプレゼントを買ってやつている。

俺にはくれないくせにどうこう事だ、と言つたら「アンタは私にプレゼントくれないじゃん」というあつさりした回答が返ってきた。そういうえば希は、毎年美紗にプレゼントを贈っている。

「お前が勝手に選べばいいだろ?」

鼻の頭にしわを寄せて嫌さ加減を強調するが、美紗はひるままず言い返す。

「何よ、希ちゃんの買い物には付き合ひ癖で、私の買い物には付き合えないの?」

「希に付き合つてなんか……」

「希ちゃんに、私がアロマトリックペーに凝つてるつて教えたの祐樹でしょう?」

そういうえば、前回美紗の欲しい物をしつこく聞かれて答えた気もある。

「でもそれは買い物に付き合つたんじゃない」

「まあいいじゃん。アンタの分も一緒に買つたげるよ

そんなついでのようなプレゼントは嬉しいな。無論、美紗からプレゼントを欲しい訳でもない。

「ほら、行くよ~

勝手に行くことに決まっていた。

\*

「ねえ、何がいいと思う?」

美紗が無邪気に「いや、もしかしたら邪氣はあるのかもしねない」俺の腕を引っ張る。

「こんなに這い込ま入れるか！？」

思わず俺は叫ぶ。

俺が立っているのはストロベリーナントカとか言うファンシーショップの前だった。ピンクと赤と白で統一された店内には、もちろん女しかいない。

「冗談じゃない。

こんなイチゴのクッショングが山積みされたような店に入るか。

「祐樹つてそういうの無駄に気にするよねー。意識しそぎだよー」

お前が意識しなさすぎなんだ、美紗ー

向かいのアロマテラピーショップ　壁にそう書いてあるからそうなんだろう　の方がマシだ。やつぱり女しかいないけど。

「ねーちよつと見てよーいつのにゃん」と、いつちのわんこ。どっちが可愛い？

頭の大きい犬と猫のぬいぐるみを持って、美紗が訊ねる。

そんなもの知るか！

「あ、やっぱコッチのひなわやにじよつかなー？　いやーーんつ

コレ可愛いくーーー！」

嫌なら抱きしめるのを止めろ。矛盾してると。

「それより美紗。希の奴、お前に買ったアロマテラピーグッズ見て、自分もやってみたいような事言つてたぞ」

……確か。つい覚えだけビ。

「本当！？」じゃあアッチのお店に行ひー。実はね～オススメのがあるんだあ

言いながら美紗が店内に突撃する。あつとこづ間にオススメのブツとやらを抱えて戻つてくる。

「ねーちよつと見てよ～」ひちのお花の香りのと、ひちの海の香り。どつちが可愛い？」

透明感のある、パンクと青のアロマキヤンドルを持つて、美紗が訊ねる。

…………そんなもの、知るか！

\*

結局美紗は、一時間近くああでもない、いでもないしたあげく、最初に選んだアロマキヤンドルのセットを買つことにしたらしい。

「良い買い物したわ」

「…………うか？」

俺はげつそりと言つ。外に出ると空の青さが眼に染みた。

「あつそうだ！」

急に美紗が立ち止まつた。

「何だよ、まだ何か買つのか？ もつつきあわないぞ」

「んーちよつと祐樹ひひで待つてて。すぐ戻つてくるわ」

荷物を全部俺に押し付けて、美紗はデパート内に取つて返す。俺はとりあえず、そちらのベンチに座つた。

空が青い。ぼやつと眺めていると、突然声をかけられた。

「よ、登川。高瀬と『テート』だって？」

「橋本……お前それどっから聞いた？」

立っていたのは橋本 翔だった。部活が終わつたあと、買い物だか暇つぶしかに来たんだな？「俺や美紗と違つて私服だ。

「我らがキャプテンが吹聴してたぞ」「村上め。違うシツつてんのに……」

後でシメてやる……。

「まあ無理ないだろ。高瀬可愛いし」「そうか？」

お互いおしめをしていた頃から知つてゐる仲だ。好いた惚れたという感覚がない。恋愛対象として見ていないので、美紗が一般的に可愛いかどうかも考えた事はなかつた。

いやあでも、十人並みだろ。容姿もスタイルも。

「ホントは、オレちょっと狙つてたんだぜ、高瀬の事」「俺に言つてどうする。

「美紗に言えれば良いだろ？？」

「負ける勝負はしない主義なんだ」

橋本は顔を上げた。

「良い天気だな」

「俺の天氣は土砂降りだけどな。荷物もちやうされたり待たされまくつたり、うんざりだ」

「高瀬と付き合つてゐる幸せの余波だと思えよ」

だから付き合つてないツつーの。

橋本はにやにやしながら立ち去った。  
全く、何考てるんだか。

\*

「お待たせ〜〜！」

それからしばらくして、美紗が帰ってきた。

「遅いッ」

「ごめんごめん。ハイこれ

美紗が何かを放つてよこす。

「なんだよこれ……」

最初に入った店で見た、頭のでかい犬のキー ホルダーだ。バスケットのユニフォームを着ている。

「誕生日プレゼント。一日早いけど

ちつとも可愛くない犬が俺を見ている。

「……コレ綴り間違つてるぞ」

「え！？ 嘘！？」

BASKETBALLが、BESKETBALLになつていてる。

マヌケだ。

美紗が犬のユニフォームをのぞき込む。

ふんわりと、何か良いにおいがした。

「あ、まあ、ありがたく貰つてやる！」

うかつにもドキドキしてしまい、俺は慌てて大声を上げる。

「何それ偉そう！」

美紗が頬を膨らませた。俺は笑う。いつの間にか空模様も快晴だ。

幸せの余波がスペルミスのぬいぐるみなら、こんな関係も悪くない、と俺は思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6223a/>

---

あなたにあいたい

2010年10月9日04時56分発行